

昔からの基本の生活に あるリアリティにこそ “たしな美”がある



三期受講生 宮本季依さん
一般社団法人和のたしな美塾
代表理事

月島商店街の路地裏の長屋の自宅を、踊りのお稽古場やコミニティスペースを兼ねた間取りへと改装を施しながら住んで、三十年以上になります。

幼少の頃に郷里の八幡さまのお祭りの踊りを見て育ち、社会人になって職場の先輩から念願の日舞の手ほどきを受けたから、子育てもしながら踊りを続けてきました。自宅に稽古場を設けてからは師匠や仲間をお招きして楽しんでおりましたが、そのうちに踊りだけではなく、茶道や着付けなど日本の文化を気軽に体験できる場として活用したい、敷居の高い徒弟制度などの垣根をなくし外国の方にも日本の文化を味わっていただきたいという思いが強くなり、四年前に「和のたしな美塾」を始めました。無料サイトで英語のHPなども作り広く呼びかけ、今日に至ります。

その一方で、勤めていた時客観的にしか感じていなかつた「月島」という町が身近になり、ここで自分がどうあるべきか、と考えるようになりました。再開発で古きものがなくなる寂しい現実にも直面している中で、この町の核心に触ることの重要性に気づきました。以前は、おそらく分け合つたり商店とも密接に関わって生活していた町もかなり変わってしまい、町の痛みを感じた時、この歴史を知る方々から貴重な話や生活の記憶を伺い形にしたいと考え「心に残る・未来に残した

い記憶・月島百景」の活動を始めました。これは、古き良き月島を知る方々にインタビューをし、月島路地マップと連動して歴史や生き様を視覚的にもご覧いただける発信をする取り組みです。実は、受講していただいた「担い手養成塾」をきっかけに協働ステーション中央との出会いいや中央区文化推進事業助成の申請にもつながり、この事業を始めることができました。

まだまだ課題はあるのですが、いつかこの町の一角に「月島メモリー館」がもてたらいいな、と思います。人や町の歴史を語り継ぐことで人としての生き方を見つけることができる…私はさらにこの町としっかりと向き合っていきたい、それがこの先、生きて行く糧になると思っています。

(平成三十年度インタビュー)



**仕事でも、生まれ育った
地元でも、人に近いこ
とをしたい・・・そんな
情熱で只今奔走中！**

三期受講生 佐々木由理さん
人形町二丁目浪花会青年部 広報担当



という家族の中で育ち、地域にも自然と根ざして生活していました。大学院を修了してからはメーカーで設計や開発の為にも、地元に増え携わる仕事をしていましたが、先々は福祉や人を繋ぐことをやりたいと思い立ち、昨年までの二年間は青年海外協力隊員としてステーディングに行っていました。

現地では、障がい児のリハビリテーション施設でアセスマントの手伝いをしたり、義肢装具を提供する施設のバリアフリー化事業に関わりました。ステーディングの人々はそれこそ家族中心の生活で、それもご近所に住んでいて、気軽に行き来したり、子どもが多く、さらに一夫多妻の家庭もありますから大家族で生活を営むのが普通で、改めて家族の大切さを感じましたね。そして滞在中、自国の福祉の知識が自分にないことの気づきもありまして、帰国後は社会福祉士にな



コミュニティが確立されました。お祭りやイベントだけではなく、防犯や有事の際の為にも、町会の役割は大きいと思うんです。地元に増えているマンションの方々にも町会活動の楽しさや有用性を知ってもらい、様々な関わり方でそれぞれの意味を感じて参加してもらえたらしいと思います。中央区・人形町・浪花会を自慢したくなる人が増えたら嬉しいですね。「担い手養成塾」で学んだ日々を実践の中で活用できてきて、是非他のメンバーオーにも受講してほし笑。

帰国をして、幼少のころから生活の一部だった地元の町会に自分の居場所と使命があると考え、人形町二丁目浪花会青年部に入りました。青年部には様々な職種の方がいて皆さんがそれぞれの長所を活かしながら積極的に活動しています。意外にも組織だった

会社職員として勤めている自分と地域で活動している自分が、行政と地域の間で揺れ動く気持ちも感じながら、自身のポジションをいま手探りしているところでもあります。

(平成三十年度インタビュー)

養成塾から 枝豆が発芽!?

三期受講生

市川喬之

今井瑞美

真鍋洋二郎

「勝どき枝豆プロジェクト」



市川 「そもそも私は、中央区に住んで仕事をしているにもかかわらず、『地域』を感じ過ごしていました。ある日養成塾のチラシを見て、地域とつながりを持つみようか!と思いつたのが受講のきっかけでした。」

真鍋・今井 「我々はマンション在住ですが、マンション内でもなかなか個々のコミュニケーションは少なくて。もともと人が好きなので、誘い合って養成塾に参加しました。」

そんな三人が、担い手養成塾三期生として二〇一七年に出会います。養成塾には毎年このような思いをもつ方が入塾しています。

市川 「講座を受けていく過程で、受講者の中に”食”に興味がある人が多いことに気づきました。会話の中で『川沿い(隅田川)に花壇はあるけど畑はないですよね』という話になつたことがあります。」

講座の期間が終わった後にも、塾生同士や講師との関係性は続いていきます。

市川 「塾の講師で来てくださったことのあるPIAZZA(地域密着型SNS)の方に連絡をして、色々と相談をしたことがありました。その時に畑の話などを持

ち出したところ、偶然にも使用していないガーデンがあるので使わないか?という話をいただきました。

早速、塾生同窓会の仲間たちに話をしたら『やる場所があるのでやらないわけはない!』と盛り上がりまして(笑)。」

今井 「その話とともに、NPO法人の大豆一〇〇粒運動を支える会から枝豆の種となる大豆をいただけることになり、何名かの塾同窓メンバーで【勝どき枝豆プロジェクト】を立ち上げることになりました。」

場所もあって、仲間もいて、種もあって。やるしかない、という思いの輪はどんどん広がっていきました。

市川 「二〇一八年四月にPIAZZAと養成塾のマーリングリストを使って【勝どき枝豆プロジェクト】キックオフの呼びかけを始めると、元受講生や近隣在住のご家族が集まりなんだか面白いことになつたわけです。」

市川さん、今井さん、真鍋さんは、立ち上げからのメンバーとして今日に至ります。

今井 「国産大豆の講習を受けた畠も整え枝豆は芽がでたら鳥に食べられないようになりますくらいで、実は収穫まではほぼそのまま

ま、育つに任せていました。」

真鍋 「地方なんかですと、モグラの穴を防ぐために枝豆を植えていたくらいですから、放つておいても実がなると思つていきました（笑）。ところが、間引きもせずにいたらどんどん枝が上に伸びてしまい栄養も行き届かず、おまけにハーブの虫除けも雨に流れられ虫にもやられました。」

市川 「まあ、そんなこんなで収穫祭を迎え、収穫した枝豆をご近所のカフェで茹でていただき、皆さんで試食しました。茹でてくださったカフェの方が、あまりにも貧弱な枝豆を見て苦笑いされていましたが（笑）。」

【枝豆プロジェクト】は一年目を迎えた。

市川 「一年目はプレッシャーを感じながら進めていましたが、二年目の今年は皆さん動きも良くなり、率先して水やりなどの

世話をしてくれる様子も見られるようになりました。また、隣の「うさぎ農園」の方も気にかけて水をまいてくださったりと、コミュニケーションもてきてうれしいですね。

仲間にはフェイスブックで、一般の方にはPIAZZAで報告や呼びかけをしたりして、SNSもうまく使って広報しています。」

真鍋 「養成塾がきっかけで立ち上げた【勝どき枝豆プロジェクト】。今年はさらにおいしい枝豆とコミュニケーションが収穫できそうです。しかし、それぞれの身近にはまだまだ課題はあります。」

真鍋 「私はマンションで防災訓練の世話役をやっています。そのせいかなさつしてくださる入居者の方も増えてきてるのですが集まりなどにはほとんど皆さん顔を出されない・・・同じ場所に住んでいる方々と関われるのはとても残念ですね。」

今井 「私としては、東日本大震災のような災害などがあった場合、地域やマンションにどんな方が住んでいらっしゃるのかは知つておきたいと思うのです。マンションの年二回の防災訓練だけでは不十分。普段からコミュニケーションを取り、何かが起きた際にはそこにどなたがいるか知つているうえでドアをノックしてあげたいと思うです。」



地域に関わらなくとも生きてはいける。また、孤独を愛する人もいる。コミュニケーションの心地よさの度合いは人それぞれ。

市川 「私なんかも、実はマンションではコミュニケーション不足だったりするんです。へたにお話しないほうがいいかなあ、とか、面倒だな、とか。でもその反面、あいさつをしてつながつてみたい気持ちもちょっとあります。」

市川 「いま、枝豆のオフシーズンはどうしようか！ などと考えています。秋に収穫した大豆できな粉をつくり、冬には晴海の餅つきに参加しようか、とか。」

今井・真鍋 「そうしたら、マンションの方も今度さそってみようかな。」